

戦乱と地球環境の危機の時代にこそ
生命の源に遡る対話と
魂をよみがえさせる歌を！

石牟礼道子・多田富雄
深き魂の交歓

言魂

— 詩・歌 —

水俣のたどってきた五十年をまざまざと思い出します。最初から、国家的欺瞞を身をもって見破ったのは、おそらく水俣病患者でありました。厚生省の組織が原因や責任の所在を隠すように動くと、たちまち県の行政も市町村の末端組織、行政協力員に至るまで、いつせいにこれにならって動き、一部の医師たちでさえこれにならって、病人を侮蔑してはばかりませんでした。闇に葬られた患者たちがどれほどいたことでしょうか。事件発覚より、五十年の年月が経ちました。医学的に救済された人はただの一人もおりません。

石牟礼道子 第十信より

私は曲がりなりにも科学、それも生物学をやつてきた人間です。水俣に象徴される生命環境の汚染は、生物全般の生存を脅かすものであることに気づかぬわけはありません。しかも汚染は地球環境にとどまらず、内部世界、つまり人間の魂を犯し続けています。内部世界の汚染、危機をどう告発するののかも話題にしたい。本当に救いはあるのでしょうか。今、生命と魂のことを語るのには、石牟礼さんくらいだとさえ思うからです。そんな願いでこの往復書簡を始めることにします。

多田富雄 第一信より



また辛夷の花の
季節になりました。
多田富雄

出演者 坪井 美香

笠井 賢一

（声の出演）野村 四郎

（声の出演）観世鏡之丞

能管・尺八 設楽 瞬山

歌・板三味線
キーボード 佐藤 岳晶

2025年

5月5日（月・祝）

15時開演（45分前開場）

於 銚仙会能楽研修所

入場料 4,000円

石牟礼道子と多田富雄の往復書簡『言魂』（2008年藤原書店刊）は、多田さんが脑梗塞による半身麻痺に加え言語障害・嚥下障害、そのうえ前立腺癌の闘病の渦中に、石牟礼さんもパーキンソン病が悪化している状況で始められた。

この二人の渾身の対話に感銘し、お二人の新作能の演出を手掛けていた私は、2008年に「アトリエ花習」の旗上げ公演としてこの対話を軸に、お二人の詩や新作能も挿入して上演した。

多田さんは、自ら立ち上げたINSLA（自然科学とリベラルアーツを統合する会）主催の講演会「日本の農と食を考える―農・能・脳から見た―」2010年4月11日（於東京大学安田講堂）で、開会の挨拶をされ、野村万作師の『三番叟』をご覧になり4月21日に逝去。翌年3月11日東北大地震。同年12月水俣と熊本で多田富雄追悼公演として『言魂』を再演し、石牟礼道子さんにご覧いただく。10年後の2021年東京の鉄仙会と福岡の森本能舞台上にて再演。

3.11から14年、震災とその関連死者は2万2千人を超え、原発事故の廃炉作業の終りは見通しも立たず、いまだに3万人近い避難者がいます。その間世界は悪意に満ちたフェイクニュースに溢れ、異常気象は大災害をもたらし、ガザの死者は5万人を超え、ウクライナ侵攻は終わりが見え、累々たる死者を目の当たりにする日々。

しかしこのような時代だからこそ鎮魂と再生への祈りは必要です。多田富雄没後15年、石牟礼道子没後7年、この生命環境の危機の時代にこそ、二人の渾身の対話と警告に耳を澄ませます。

往復書簡『言魂』より 詩・歌

※多田富雄は笠井賢一、石牟礼道子は坪井美香が語る。◆印は挿入作品

◆プロローグ 石牟礼道子詩『花を奉る』

第一信 受苦ということ ― 多田富雄 坪井美香 笠井賢一

◆多田富雄詩『歌占』

第二信 なふ、われは 生き人か、死に人か ― 石牟礼道子 坪井美香

◆多田富雄能『無明の井』より 野村四郎

◆石牟礼道子詩『浜の甲羅』 坪井美香

第三信 老人が生き延びる覚悟 ― 多田富雄 笠井賢一

第四信 いまわのきわの祈り ― 石牟礼道子 坪井美香

◆多田富雄詩『君は憤怒仏のように』 笠井賢一

第五信 ユタの目と第二の目 ― 多田富雄 笠井賢一

◆石牟礼道子『緑亜紀の蝶』より「空と海と」 歌 坪井美香

第六信 いのちのあかり ― 石牟礼道子 坪井美香

第七信 自分を見つめる力・ 能の歌と舞の表現 ― 多田富雄 笠井賢一

◆石牟礼道子能『不知火』より 謡 観世鏡之丞

第八信 花はいずこ ― 石牟礼道子 坪井美香

◆石牟礼道子『六道御前』より 浄瑠璃 歌・板三味線 佐藤岳晶

第九信 また来ん春 ― 多田富雄 笠井賢一

第十信 ゆたかな沈黙 ― 石牟礼道子 坪井美香

◆エピローグ 多田富雄詩『新しい赦しの国』 坪井美香 笠井賢一

多田富雄 1934年 茨城県結城市生まれ。東京大学名誉教授。世界的な免疫学者として抑制T細胞を発見。野口英世賞、朝日賞など多数受賞。文化功勞者。能に造詣が深く、自ら小鼓を打ち、心臓移植を主題とする「無明の井」をはじめ「望恨歌」「石仙人」など現代の課題をテーマとする新作能を手がけた。2001年脑梗塞に倒れて後、詩人・能作者として再生、「原爆忌」「長崎の聖母」「沖縄残月記」「花供養」など新作能を書いた。リハビリ診療報酬改定の撤回を求める運動に取り組む。著書に全詩集「寛容」「免疫の意味論」「脳の中の能舞台」「残夢整理」など多数。自然科学と人文学の統合を体現した「万能人」であった。

石牟礼道子 1927年 熊本県天草郡に生まれ。詩人・作家。「苦界浄土―わが水俣病」は文明の病としての水俣病を鎮魂の文学として完成させた。マグサイサイ賞、紫式部文学賞朝日賞、芸術選奨文芸科学大臣賞受賞。著書に「はにかみの国 石牟礼道子全詩集」「石牟礼道子全集「不知火」を藤原書店より刊行。作家としてのすべてが凝縮された新作能「不知火」は東京、熊本、2004年には水俣で奉納上演された。多田富雄は新作能の類型を破る画期的な作品と評価した。現代の病巣を癒す力と、深い祈りと歌に溢れた作品群は日本文学の枠を超えた重要な文学として、ますます示唆に富んでいる。

2025年

5月5日（月・祝）

15時開演（45分前開場）

於 鉄仙会能楽研修所

東京都港区南青山4-21-29

TEL 03-3401-2285

（交通）表参道駅A4出口徒歩3分

入場料 4000円（全自由席）

問合せ・申込 アトリエ花習

TEL 090-9676-3798

mail@atelierkashu.com

ホームページより 申込フォームへ

後援 藤原書店

